北海道函館市における風名語彙の変容

──漁業従事者を対象とした経年比較を通して──

志 村 文 隆

はじめに

漁業従事者のなかで多様に用いられてきた各地の風名語彙には、共通語化をはじめとした変化が認められる。しかし、その実態は、これまで共時的な年層比較を通して示されることが多かった。本稿では、北海道函館市の漁業従事者を対象に実施した、約 25 年の間隔を置いた二次にわたる調査から風名語彙の経年変化を観察し、特に指示風向を意味とする語彙構造の変容について述べる。

1. 問題の所在と本稿の目的

漁業社会のなかで用いられる風名語彙の実態や特徴について、語彙の変容を提示した考察は少ない。室山敏昭（1987、1998）では、それぞれ広島県と大分県での風位語彙の調査事例を通して、年層差をもとにした語彙の変容状況を詳細に明らかにしている。そこでは、年層の異なる被調査者を対象とした語彙量や意義特徴についての比較が行われ、壮年層では、老年層と異なって特定の方位の範囲に語彙量が傾斜しないことや、性質呼称が減少している実態等が示されている。

筆者もこれまでに北海道函館市を調査地とした志村（2005）、および沖縄県宮古島市を調査地とした同（2014a）において、漁業従事者を対象に異なる年齢層間で若干の比較を行ったことがある。これらのなかで、低い年齢層では旧来の方言語彙が消滅し、共通語化が進むとともに、方言形を用いた微細な風向の弁別も薄れ、結果的に語彙量も減少していることがうかがえた。そこでは指示風向を意味とする語彙に一様な共通語化は生じておらず、高年層に見られるような地域特有の繁簡のある語彙構造が残るような事例も存在した。特に、操業のうえで危険を伝達する役割を持つ語彙は、地域の風の特性を反映した一部の語彙とともに、低い年齢層の漁業従事者にも一定程度保持されていることが認められた。漁業従事者が用いる職業語の性格も併せ持つ、地域の風名語彙の世代差の実態は、時代の推移とともに現在どのような変化を遂げているだろうか。

本稿では函館市の志海苔地区を調査地として、共時的な年層比較ではなく、約 25 年の間隔を置いた風名語彙の経年変化を観察し、特に指示風向における語彙構造の変容の特徴について述べる[注 1]。

2. 調査の概要

2.1 調査地と調査時期

調査地は北海道函館市志海苔町である。町内にある志海苔漁港は函館市の南東部に位置し、津軽海峡域でのイカ漁などが行われてきた。第一次調査は 1999 年 3 月に予備調査として実施し、続いて本調査を 2000 年 8 月に行った。第二次調査は、一次予備調査から 25 年後となる 2024 年 9 月に実施した。

2.2 被調査者と調査場所および調査担当者

両調査ともに、志海苔漁港から出漁して海峡沿岸で操業する、志海苔地区の出身の漁業従事者を選択した。第一次となる 2000 年本調査では、高年層漁業従事者 2 名（I 氏 1992 年生まれ、T 氏 1935 年生まれ）を対象とし、被調査者宅での調査を行った。第二次 2024 年調査では、高年層 1 名（A 氏 1950 年生まれ）および中年層 1 名（K 氏 1961 年生まれ）を対象とし[注 2]、A 氏は被調査

者宅、K 氏は志海苔漁港にて聞き取りを行った。調査はすべて筆者が担当した。本稿では上記 4 名の調査結果を用いた。

3. 風名語彙と指示風向

3.1 2000 年調査の風名語彙

2000 年調査当時の高年層が用いる語彙特徴については、すでに志村（2004、2005）等で報告を行っている。経年比較を行うにあたって、ここであらためて I 氏と T 氏の語彙特徴ついて、特に語が指示する風向との関係から内容を簡単に触れておく。

I 氏が用いる語彙について、風向（方位）を意味の単位とした体系図を図 1 に示す (注 3)。矢印で示した、タマガゼ・キタノガゼ・アイノガゼ（アイ）・ヤマセ・アガヤマセ・ミナミカゼ・シカダ・クダリシカダ・クダリ・ニシカゼの 10 語（省略形のアイを含めると 11 語）が用いられ、8 風向の弁別がある。

図中に引かれた方位を示す実線について、線上にある語あるいは線に挟まれた語は指示する風向に当該方位が含まれることを表し、一方で点線は、その方位自体は意味に含まれないことを示す。たとえばミナミカゼでは、南南東から南南西の範囲を指示するが、両端に点線で示した南南東と南南西の方位自体はミナミカゼの指示風向に含まれないことを示している。

基本 16 方位のうち、南南西のシカダや南西のクダリのように、単一の方位に特定の語が認められる。クダリシカダでは南西と南南西の間に位置し、25 度にも満たない範囲をクダリおよびシカダとの区別を持って用いられている。他方、ヤマセとアガヤマセでは、東南東から南までを指示する約 70 度にわたる範囲を意味として持っている。

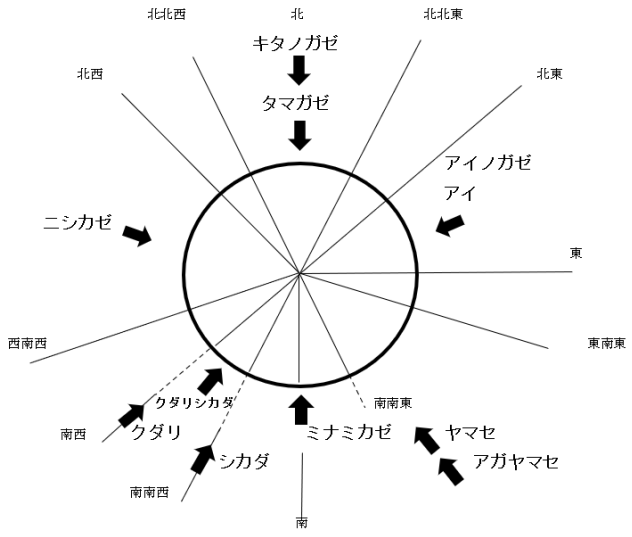

図 1　風名語彙と指示風向（2000 年 I 氏）

次に T 氏の語彙を図 2 に示す。アイノガゼ（アイ）・アイシモガゼ・ヤマセ・アガヤマセ・ミナミヤマセ・クダリ・シカダ・ニシカゼ・タマカゼ・アイタマカゼ・アラシの 11 語（省略形のアイを含めると 12 語）が用いられ、10 風向の弁別がある。アラシは夏の「オガ」（陸）からの弱風とされ、点線で示したように東と西は含まれない約 180 度の風向の広がりを持っている。クダリは南と南南西の両端を含んで約 25 度の指示風向を持ち、シカダは点線で示したように、意味には含まれない南南西と意味として含まれる南西との間を指示方位としている。

I 氏と T 氏の語彙構造には共通点と相違点が認められた。共通する語として、アイノガゼ（アイ）・ヤマセ・アガヤマセ・クダリ・シカダ・ニシカゼ・タマカゼ（タマガゼ）があるが、たとえば、タマカゼやヤマセのように、両者で指示風向が異なる例がある。これら共通する語彙について両者の指示風向を見ると、T 氏は I 氏の語彙配置から左回りに約 25 度から 45 度の角度で移動した構造をしており、クダリとシカダの指示風向が入れ替わるなど、細部に差異が存在している。

また、両氏の語には単に風向を指示するだけの用法にとどまらずに、向後の天候変化や操業の適否等の意味が内包されている (注 4)。I 氏では北付近のタマガゼ、南東付近のヤマセ、南西付近の

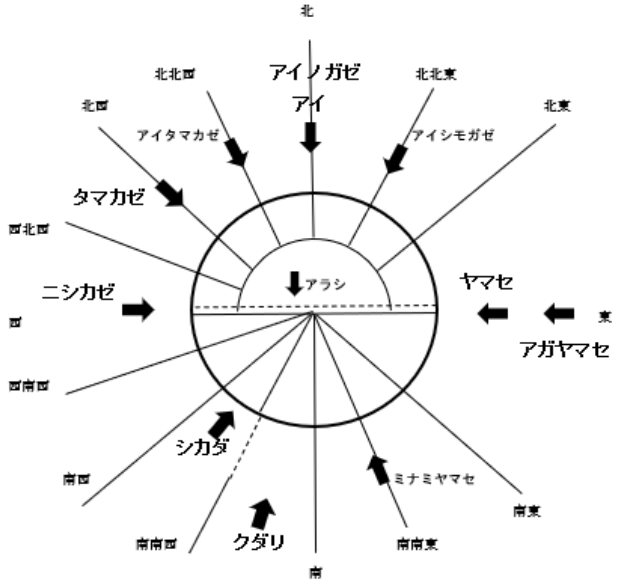

図 2　風名語彙と指示風向（2000 年 T 氏）

シカダ･クダリシカダ･クダリの 5 語を、強風が多いとして警戒する風と位置づけている。そのなかでも両氏は、日本海側を北上する発達した低気圧や台風などによる暴風となる、南南西のシカダを「恐ろしい風」と説明している。風向変化（カワセ）には常時注意が向けられており、各語は向後の天候等を把握するための指標としても用いられている。

志海苔漁港は津軽海峡に面して南東方向に開ける。漁港のある函館市南東部は、年間で北北東の風が最も多く、次いで西北西となっている（注 5）。風配図によると北成分が多い分布であり（注 6）、操業の海域となる津軽海峡では、東西両方向の風が年間を通して最多である（注 7）。T 氏はヤマセが「一番この土地で多い」風と言い、アガヤマゼも同様とする。また、ニシカゼも日常的な風と説明している。一方の I 氏はニシカゼを「一番この風が多い」とし、ヤマセは「年中ある」風と説明する。図 1 および図 2 に示したように、これらの語彙は約 45 度から約 90 度にわたる広い指示風向を持ち、当該地で卓越する風向事象の特徴を反映している。

3.2 2024 年調査の風名語彙

2024 年の調査から得られた語彙を示し、特に各語の意味特徴のなかで被調査者が強調した、警戒する風の説明部分を中心に取り上げる。

高年層 A 氏が用いる語彙についての体系図を図 3 に示す。キタ・ホクトー・ヤマセ・ミナミ・ナンセー・ニシ・ホクセーの 7 語が確認でき、7 風向の弁別がある。共通語形が大半を占めるなかで、唯一の方言形であるヤマセは南を含まない約 90 度の指示風向の広がりを持ち、日常的に「よく使う」語としている。

A 氏はホクトー・ヤマセ・ナンセー・ホクセーに警戒している。漁港が津軽海峡に面して南東に向いているため、特に南東からの風を中心とするヤマセが吹く時は出漁できないと言う。ヤマセは、漁港南東側に位置する黒岩岬からの波のうねりも出現の目印となっている。また、出漁中すぐに帰港する風はヤマセとナンセーである。ホクセーは「オカ」（陸側）近くでは漁に問題はないが、海峡沖に 5 マイル以上航行すると風が出てくる。さらに、2000 年の被調査者と同様に、風向変化を示す語のカワセを用いながら、上記の各語における警戒すべき風の性質が引き出されている。左回りの風向変化を表すウジガワセの場合、風はすぐに落ちてくる。しかし、波が落ちず、なかなか凪にならない。反対に右回りのオキガワセでは、特に台風などの場合にヤマセからうねりが出始め、すぐにナンセーからニシに「カワス」特徴があるとする。カワセが見られた場合は「カワセ吹ぐどー」と互いに声を出して確認し、沖へは向かわないようにする。

中年層 K 氏が用いる語彙を図 4 に示した。各語の示す指示風向は説明時に「大雑把」であると話すなかでも、オカ・ホクトー・ヤマセ・ヒガシ・ナントー・ミナミ・シカダ・ニシ・ホクセーの 9 語が示され、8 風向の弁別がある。東から南東にかけてはヤマセを主に用いるが、ヒガシも

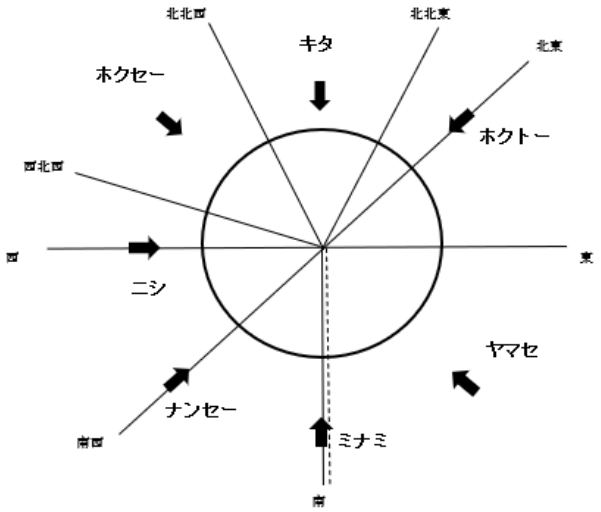

図 3　風名語彙と指示風向（2024 年 A 氏）

併用し、両者の区別は「定かではない」と言う。ヤマセは漁港の入り口にあたる風向のため、港に波が入るうえに、低気圧が近づき天候が悪くなることから、A 氏と同様に特に「気を付けている」とする風である。ヤマセが吹くと夜に波が出る特徴を表す「ヤマセとオバケは夜騒ぐ」という諺も天候予測として用いることがある(注8)。警戒する風にはシカダもあり、「シカダ吹げば、まぐれで来る」（南西の風が吹くと、波が一気に出てくる）と用いられている。北風向を中心とするオカは、漁場である海峡から見て北側にある陸（おか）を指す語でもある。このことから K 氏は陸から吹いてくる風を「オカからの風」のようにも使用する一方で、北を中心に北北西から北北東の風向を表す語としても用いている。

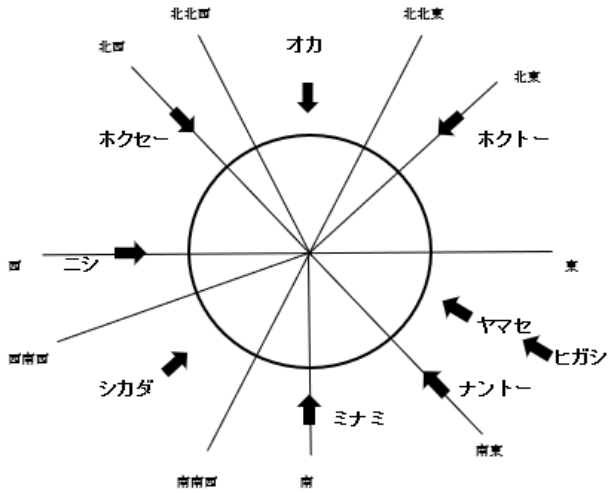

図 4　風名語彙と指示風向（2024 年 K 氏）

4. 風名語彙の変容

4.1 語彙の共通語化

4 氏の語彙数と風向弁別数を比較すると、2000 年 I 氏の 10 語と 8 風向の弁別、T 氏の 11 語と 10 風向の弁別に対して、2024 年 A 氏は 7 語と 7 風向の弁別、9 語と 8 風向の弁別となっている。このうち、有声化した複合語後部要素の「ガゼ」を含んで、使用語としての共通語形が見られたのは、I 氏でキタノガゼ・ミナミカゼ・ニシカゼ 3 語、T 氏ではニシカゼ 1 語のみであった。一方、A 氏ではキタ・ホクトー・ミナミ・ナンセー・ニシ・ホクセーの 6 語で、方言形はヤマセのみである。K 氏ではホクトー・ヒガシ・ナントー・ミナミ・ニシ・ホクセーに加え、内陸の意味でのオカ（陸）を含めると共通語形は 8 語であり、方言形はヤマセとシカダの 2 語に限られた。このように、2000 年当時は全体として語彙量が多く、そのなかで方言形が多く用いられながら、約 25 年後にはほとんどが共通語形で占められた。また、共通語形にはホクトーやナントーなどの漢語使用が顕著である(注9)。

調査時に予想語形収集のために利用した語彙集等の文献には、当地の方言形が多く含まれている。このうち、関口（1985）所収の 1980 年に実施した全国規模となる風の地方名の調査では、志海苔町の西に隣接する根崎町での結果などが含まれており、アイカゼ（北東）・ヤマセ（東）・ミナミヤマセ（南東）・シカダ（南西）・タカマゼ（北西）の 5 語の方言形の記載と 5 風向の弁別が見える(注10)。また津軽海峡海難防止研究会編（1989）の「風の方位別呼び名（俗称）」には、「上

磯・函館地区」の用例が示されており、基本 8 風向別に語が掲載されている[注11]。各風向に複数の語が記載されているため、それぞれの語の実際の使い分けまでは読み取れないものの、方位ごとに用いられる語形の存在は知ることができる。以下に引用して示す。

・北　アイ、キタ、タマカゼ、アイタマカゼ、タバカゼ、アラシ
・北東　アイノカゼ、アイタマ、アイシモ、シモカゼ、ヤマセ
・東　ヤマセ、シモヤマセ、ホンヤマセ、アカヤマセ、アイノカゼ
・南東　ヤマセ、ミナミヤマセ、イナサ
・南　ミナミ、クダリ、マクダリ
・南西　シカダ、ヒカタ、ニシヒカタ、クダリ
・西　ニシ
・北西　タマカゼ、タバカゼ、ニシタマカゼ

これらの語については被調査者に使用の有無を確認しており、その語形の多くは 2000 年調査時点では使用語として現れた。また、この方位別呼び名として掲載されている語のなかの共通語形は、意味変異のあるアラシを除けば、キタ・ミナミ・ニシの 3 語であり、これらは 2024 年の結果にも出現した語であった。A 氏と K 氏では、両氏使用のヤマセと K 氏が使用するシカダ以外の語については、過去使用歴も皆無であった。後述するように、シカダはこの地域で最も警戒する南西方面の風を表す語として機能しており、A 氏では語義を保ちつつも共通語のナンセーに交替をしている。このことから、志海苔地区で用いられてきた指示風向を表す方言語形の多くは、消滅傾向にあると言うことができる。

4.2 語彙構造の特質

風名語彙の共通語化の実態に加えて、語彙構造にはどのような変化があるだろうか。図 1 から図 4 において語形と指示風向の対応関係を見ると、被調査者ごとに差異が多いことがわかる。そのなかでも、北風向を中心とする語は 4 者すべてに異なるものの、北北西から北北東を指示する意味範囲部分は共通している。しかし、I 氏の東南東から南西方向には 6 語からなる緊密な構造がある一方で、北半分は簡素で、語の配置全体には繁簡が存在する。T 氏には語彙構造の穴は少なく、南から北方面にかけて集中して語が配置されるが、ほぼ方位全体にわたって語が均等に用意されている。このなかには、北北東のアイシモガゼ、南南東のミナミヤマセ、北西から北北西のアイタマカゼに見られる、2 風向の語を結合させた複合語がある。ただし、T 氏自身ではアイシモカゼの後部要素となるシモカゼは使用されていない。

これに対して、2024 年の場合は I 氏のような繁簡のある構造特徴が薄くなり、両名に共通語を中心とした語が用いられながら、それぞれの語は各方位に比較的均等な配置で存在することが確認できる[注12]。このなかでは、異なる風向を表す 2 語を結合させた複合語が現れなくなり、上述のように、ホクトーやナントーのような漢語が各風向を占める結果となった。

また、同一風向に複数の語彙が使用されている。2000 年時点では、風の性質による意味の異なりを持つ複数の語の存在があった。このうち、I 氏はキタノガゼを弱風、一方のタマガゼを強風とする。また、I 氏と T 氏に共通する、ヤマセとアガヤマセもある。南南東から南を指示する I 氏が用いるヤマセでは「年中いつでも」吹く風で、「雨模様、荒れ模様」になるのに対し、アガヤマセでは「夏の昼前」に吹く風であり、「天気が良くて時化にならない」、「どうせアガヤマセだから凪になる」とする意味の区別が存在している。同様に、両語が北東から南東を指示する T 氏では、ヤマセが「雨模様」の天候で「夏から秋に多く」吹くのに対して、「天気が良い時」に「年中ある」のがアガヤマセとする、両語に意味の異なりがある。北を中心に 180 度の風向を持つアラシにおいても、夏で暑くなると「夜にオガから吹いてくる」、また「あまり強くない風」として、同じ北半分を含む他の語との間に意味の区別を持つ[注13]。こうした複数の語が特定風向内で相互に重な

るという構造があった。

一方、2024 年調査の K 氏に見られたヤマセとヒガシでは、3.2 に記したように、特に意味上の区別を持っていない。このように、同一の風向を指示する複数の語においては、語彙量の減少とともに、意味の使い分け部分にも消滅の傾向が認められる。指示風向からなる語彙構造は単層とも言える形に変化している。

しかし、上記のような語彙構造の変容の実態のなかで、指示する風向から構築される構造部分には、必ずしも基本 8 風向あるいは 16 風向に均等に語が貼りついてはいないことがわかる。さらに 2024 年時点でのヤマセやシカダの 2 語を例とする方言の残存のように、構造を構成するすべての語に一様に共通語化が及んでいるわけではない。これら 2 語に代表される、漁業従事者間に操業上重要な、警戒すべき事項として共有されてきた風の性質が、その意味を担う特定の方言形を維持する要因となり、共通語への交替を止めているとも考えられる。共通語が多くを占める語彙体系にあっても、全体を見ると、当地域の漁業従事者特有の、指示風向の広狭等を含んだ語彙構造はわずかながらも維持されていると言える（注 14）。

このように、大きく共通語化が進行するなかでも、特徴的な風名語彙構造の一部は約 25 年という実時間の経過後も残存していることが認められた。

おわりに

北海道函館市志海苔町の漁業従事者を対象とした、約 25 年の間隔を置いた二期の調査から風名語彙の経年変化を観察し、主として以下のことを述べた。

(1) 志海苔地区では当初は風名語彙の語彙量が多く、方言形が豊富に用いられていたが、約 25 年後にはほとんどが共通語形で占められた。このことから、指示風向を意味とする方言語形の多くは消滅傾向にある。

(2) 風名語彙の繁簡のある構造特徴が次第に見えにくくなり、共通語を中心とする語が各方位にほぼ均等な配置で存在している。また、特定風向内で意味の異なる複数の語が相互に重なる構造も衰退している。

(3) 操業上重要な事項として共有されてきた風の性質が存在し、その意味が内包された語は一部維持されており、共通語主体の語彙構造にあっても、指示風向の広狭として認められる。

今後は、風名語彙の衰退の要因に留意しながら、語彙の世代差や地域の生業差にも考察を進めたい。

注 1　当該地における臨地調査は、函館市内の他漁港でも継続して実施にあたっている。

注 2　2024 年現在、志海苔漁港を利用する当地の漁業従事者は減少しており、2000 年当時に比べて調査可能なインフォーマントも限られるという現状があった。このため、語彙の収集・考察には、さらに漁業規模の大きな地域での調査を重ねる必要性も存在している。同様の提言は室山（1998 : 243）にも示されている。

注 3　本稿の図 1 および図 2 では、当初論文掲載の内容はそのままに、作図形式を変更している。

注 4　詳細は志村（2004 : 7-10）等に示した。

注 5　気象庁ホームページ（2024）「高松（渡島地方）」のデータによる。

注 6　函館市史編纂室編（1998 : 160-161）による。

注 7　津軽海峡海難防止研究会編（1989 : 27-31）による。

注 8　津軽海峡海難防止研究会編（1989 : 34-35）に「ヤマセと化物、夜中しで騒ぐ」等、類似の諺が掲載されている。こうした俚諺や成句的表現は 2000 年調査時にも確認しているが（志村 2004 : 12）、2024 年調査では少数例の回答にとどまった。

注 9　室山（1998 : 232）に壮年層の特有語彙のなかに漢語等があるとする記述がある。

注 10　本書をデータとして利用した津軽海峡域での風名語彙分布については、志村（2014b）で提示した。

注 11　同書 25 ページ。

注 12　室山（1998：226-227）は、老年層に対する壮年層における方位の弁別と方位ごとの語彙量の特徴を「量的観点からは, かなり調和のとれた円環構造に変化している」と指摘しており、本調査の結果にも同様の傾向が認められる。

注 13　I 氏と T 氏それぞれに見られる語彙の重なりの実態については、志村（2004：4-5）より引用した。

注 14　風名語彙の年層差を一部観察した志村（2005、2014a）では、語彙が風向変化の操業に関わる重要な警告等を効率的に伝達する指標となることを示し、これが地域特有の語彙構造にも反映して低い年齢層に維持される実態を述べた。

参考文献

気象庁ホームページ（2024）「過去の気象データ検索」
http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php（2024 年 12 月 23 日・最終確認）

久木田恵（1986）「漁業社会における風の語彙体系の記述と比較の方法」『方言研究年報』29、91-109

志村文隆（2004）「北海道道南地方漁業従事者の風位語彙」『宮城学院女子大学研究論文集』99、1-14

志村文隆（2005）「風位語彙の体系と意味―函館市入舟町漁業従事者を中心に―」『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』14、1-16

志村文隆（2014a）「沖縄県池間島方言の風位語彙」『弘前大学国語国文学』35、56-72

志村文隆（2014b）「津軽海峡沿岸地域における風位語彙の分布－『風の事典』を資料として－」小野米一・菅泰雄・佐々木冠編『北海道方言研究会 40 周年記念論文集　生活語の世界』北海道方言研究会、92-99

関口 武（1985）『風の事典』原書房

津軽海峡海難防止研究会編（1989）『津軽海峡の天気とことわざ』北海道新聞社

函館市史編纂室編（1998）『函館市史　銭亀沢編』函館市

室山敏昭（1987）『生活語彙の基礎的研究』和泉書院

室山敏昭（1998）『生活語彙の構造と地域文化－文化言語学序説－』和泉書院

付記

本稿に関する二次にわたる調査に際し、ご協力を賜りました話者の皆様、函館市漁業協同組合宇賀支所の皆様に、あらためまして御礼申し上げます。